

このシャチはオス？ それともメス？



▲当時制作にたずさわった鬼師の皆さん
 (前列向かって左から) 杉浦伸さん、石川幸雄さん、神谷博基さん、
 加藤元彦さん、服部末男さん、山本信彦さん、山下吉範さん
 (後列向かって左から) 萩原尚さん、山下敦さん、神谷英廣さん



▲20年前のおひろめのように (制作者一同ほか)

日本一巨大鯨製作者名		
◎ 梶子武雄	◎ 加藤元彦	◎ 梶川英治
神谷博基	石川幸雄	神谷吉之
福井第一	杉浦伸	杉浦 伸
服部末男	神谷英次	山本博基
神谷龍正	神谷英広	日守嘉男
神谷益生	萩原尚	山下久敏
岩月英之	萩 本 博	神谷伸道
杉浦龍夫	山下吉範	石川謙吉
岡野一彦	萩原龍二	萩原 尚
※ ◎ 制作責任者		
以上27名		

▲おひろめ当時に掲示された看板

火花を散らし、怒号も飛び交ったものさ。若手はとにかく必死に技を覚えようと夢中だったな。」「20年経った今でも、このシャチがかわら美術館、ひいては高浜市のシンボルとして愛されていてうれしいよ。」など、口をそろえながら感慨深げに語る。

また、当時、若手だった鬼師は「鬼師の醍醐味は、自分が手がけた作品が数百年先の後世にも残ること。今では産地を越えた職人同士の技術交流も活発になっていて、みんなで瓦を盛りあげていこうと頑張っている。あれから20年、自分たちもベテランの域に入ってきた。今度は自分たちが、若手に多くのことを伝えていきたい。瓦は日本文化にはなくてはならないものだからね。」と熱い心意気を見せている。

開館20周年を迎えるかわら美術館。またここから、歴史の新たな1ページが始まる。

“撮っておき” の たかはま

【第37回】

「ひと」「もの」「文化」などなど、有形・無形を問わず、高浜市の日常の暮らしの中にあるとっておきの「お宝」を紹介します。

かわら美術館 「瓦製巨大シャチ」

かわら美術館の正面玄関で“来館者のお出迎え”をしている一対の瓦製巨大シャチ。平成7年、美術館のオープンに合わせて制作された。日本鬼師の会三州支部に所属する若手からベテランまで27人の鬼師による力作で、モデルは名古屋城の金シャチ。高さは約3.3m、金シャチよりも0.5mほど高いとか。使った粘土の量は約4.5トン。仕事が終わった後の夜間や土・日曜日に集まり、ある鬼瓦工場の一角を借りて、オス・メス各36ブロックに分け、約7か月がかりで制作したそうだ。愛称を公募し、オスはソラちゃん、メスはコメちゃんとなづけられた。

当時、制作に携わったベテラン鬼師の皆さんは「昔は、技を覚えなければ師匠の手さばきを見て盗めというのが当たり前だった。でも、技術伝承や産地発展のためには、これからは職人同士の交流が必要とのことから、この企画が始まったんだ。」「ときには職人同士が

LEIA A PÁGINA EM PORTUGUÊS!

ポルトガル語のページ (P34) を読んでください!

広報 たかはま

早期配布にご協力ください。

編集・発行 / 高浜市役所総合政策グループ

〒444-1398 愛知県高浜市青木町四丁目1番地2
 TEL (0566) 52-1111 FAX (0566) 52-1110
<http://www.city.takahama.lg.jp/>
 電子メール info@city.takahama.lg.jp



VEGETABLE OIL INK 広報たかはまは植物油インキを使用しています。